

実践報告

札幌市立西岡北小学校

(1) 研究内容

研究課題：「学校にアイヌ民族の方を招いて行う体験的学習の研究」

- アイヌ文化について正しい知識を得て理解を深めるとともに、北海道の先住民族であるアイヌの社会や文化を尊重する態度を養う。

(2) 実践の内容

【実践①】札幌大学ウレシパクラブとの交流について

○ ねらい

アイヌ文化について学習することを通して、アイヌ民族の社会や文化を理解し、尊重する態度を養う。

○ 学習内容

<ウレシパクラブの紹介>

最初に「イランカラプテ」（こんにちは）とアイヌ語での挨拶で交流がスタートした。ウレシパクラブの活動内容をパワーポイントで分かりやすく説明してくれた。子どもたちもアイヌ文化の継承の大切さを感じたようであった。また、札幌大学にこのような団体があることを知り、より身近に感じたようであった。



<アイヌ語を覚えよう！>



カルタの言葉の発音や意味を確認した後に、グループに分かれてカルタ遊びをした。カルタ遊びの後は、アイヌ語カルタクイズをした。アイヌの人々の道具や動物の名前など、カルタ遊びを通して学んだアイヌ語がクイズとして出題された。答え合わせも正解を伝えるだけでなく、活動を取り入れることで子どもたちは夢中になっていた。

<アイヌの楽器・踊り>

次にムックリの演奏を聴いた。子どもたちは奥行きのある不思議な音色に聴き入っていた。アイヌの人たちの暮らしを思い浮かべながら、興味深く聴いていた。

演奏の後は、アイヌ舞踊を見た。①「クリムセ（弓踊り）」、②「エムシリムセ（刀の舞）」、③「チャッピーク（雨ツバメの踊り）」と3種類

の踊りを見た。魔払いや楽しみのためなど踊りにはそれぞれ意味があり、踊りがアイヌの人たちの生活に根差していることを学ぶことができた。

体験的な活動を多く取り入れたプログラムは、子どもたちにとって印象深い学習となった。学習の最後には、「チャッピーク（雨ツバメの踊り）」を学生と子どもたちみんなです踊った。「イヤイライケレ」と挨拶をし、心を一つにして学習を終えることができた。



(3) 研究のまとめ

① 成果

- 連絡調整の窓口が札幌大学インターコミュニケーションセンター（SUICC）とウレシパクラブ（学生）の両方にあるため、運営と内容を整理して調整をすることができた。担当者が変わってもスムーズな連絡調整が可能となっている。
- 継続してこの事業に取り組んでいることから、ウレシパクラブとの交流を教育課程に位置付け、計画的効果的な学習を進めることができています。加えて、単元を通して子どもたちの意欲が高まり、意欲的な学習につながった。交流では、実際にアイヌ民族の歌や踊りを間近で見たり、体験できたりするのは、他の何にも代え難い。
- アイヌの人たちを身近に感じることができ、学生（アイヌ民族）となかよくなって学習を終えることができています。本校教諭もこの取組や内容への理解が深まっている。

② 課題

- ウレシパクラブとの日程調整が難しい。交流時期が2月であるが、日程調整は年度初め（5月頃まで）に決定しておく必要があった。
- 交流自体は大変有効であるが、年に1度であるため、欲を言えば、数回の交流ができればより理解が深まると考える。
- 単元を見通して授業改善することで、ますます効果的な取組となると考えられる。年度や担当教諭が変わるたびに活動に困ることのないように引き継いでいく必要がある。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- 体験的活動は、計画的に進めないと、活動あって学びなしになってしまう。単元を通して学びを積み上げていくことが大切。
- 小中学校が互いに情報交換して連携を広げることが、人権意識を育てるのに有効であることは理解しつつも、時間的内容的にも、なかなか進められていない。